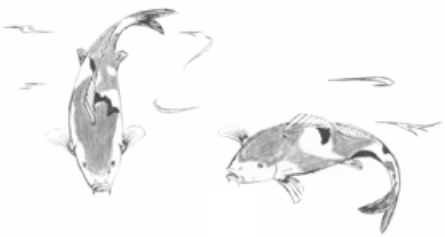
慈　恵

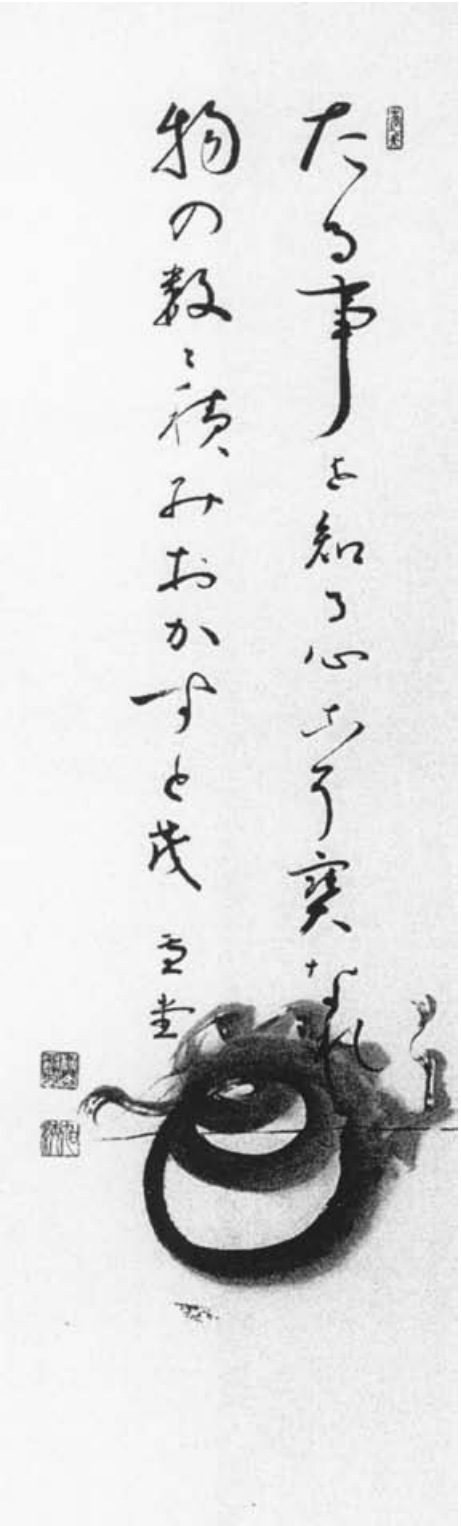
平成31年　No.66



春

宗教法人 慈 恵 院　付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



たる事を知る心こそ
宝なれ
物の数々積みおかずとも
雪堂

横山天啓

書道の本源を求めて、八十余年の生涯を書と禅に捧げた横山天啓翁（雪堂、昭和四十一年八十四歳で死去）は、書における墨気と境涯を重んじ、筆禅道を提唱、実践した。世に媚びることなく清貧の中で道を求めた翁の姿は〝書仙〟の趣があった。

「禅画報」より

雨もりする丈室

妙心寺における関山大師の居室はあばら屋そのもので、雨の降るたびにすわる場所がないほどであった。その日もひどい雨であった。大師は傍に控えていた者たちに命じた。

「何か器を持って来て、雨の漏るところへ当てなさい」

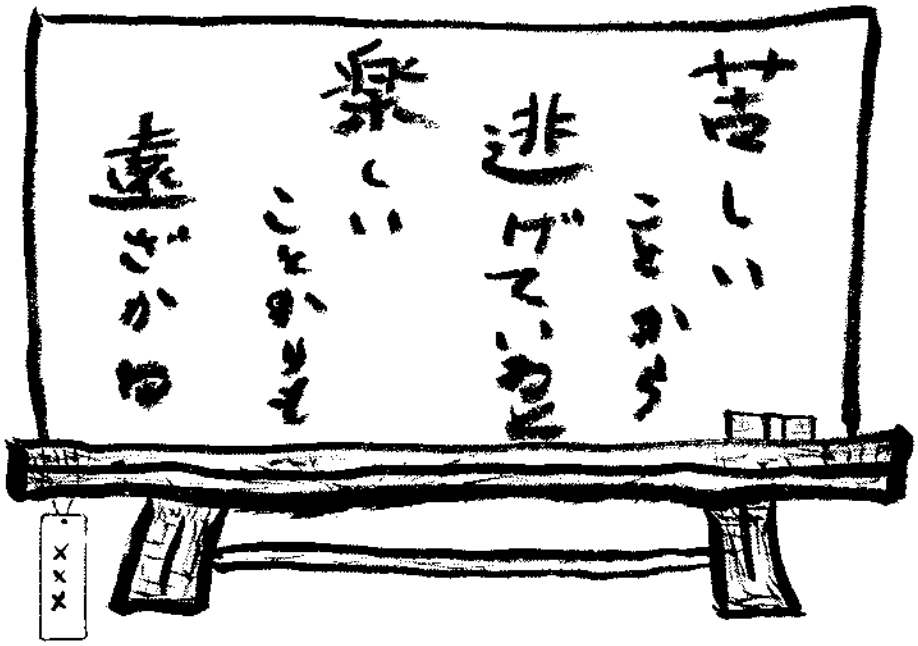
すると一人の小僧はただちにざるを持って来た。大師はこれをはなはだ賞められた。ところが、その後から、もう一人の小僧が桶を持って来たところ、大師は、

「このまぬけ面(づら)め」

と罵って、部屋から追い出してしまった。

関山慧玄（一二七七～一三六〇）
臨済宗。妙心寺の開山

掲示板



クリの恐怖体験

調布市　野口 喜美代（50）

今から20年程前に千葉県の保護施設から一匹の子犬を家族に向かい入れました。メスの雑種犬で保護施設にいた時は4匹の兄弟と一緒のゲージに入れられ、元気いっぱいじゃれあっていました。兄弟間では唯一の女の子で色も他の子はみんな真っ白なのに対してその子だけは薄茶の毛色をしており、ケージの中で兄弟達を足蹴にしながら暴れ回っていたのが印象的な子でした。

「クリ」と名付け、ずっと同じ屋根の下で共に暮らしました。その性格は幼少期に手をかけ過ぎたのか、施設時代の勇ましさは幻だったのではないかと首を傾げるくらい気の小さい内弁慶の子に育ってしまいました。私達家族以外の人間はもちろん、他の飼い犬ともまったく馴染めず、散歩時に他のワンちゃんとすれ違う時にはできるだけ距離を取ろうと壁にへばりつくようにして歩を進めるというなんとも露骨な態度を取ります。大きな音や声も苦手で、床に落ちてしまった食べ物に食いついた瞬間、「あっ！」とひと声あげるとビクッと体を震わせ、こちらを凝視しながら思わず口の端から食べ物をポロリと落とすといった有様です。そのように小心者で苦手なものが多いクリでしたがものすごい恐怖を味わったのが平成23年3月11日に発生した東日本大震災です。

私も生まれて初めて震度5の地震を体験しました。時間にしてわずか数十秒の大揺れではありましたが立ってはいられずテーブルの下に蹲っていました。しばらくして身動きがとれるようになり、ふっと横に視線を移すと目をかっと見開いたまま身動きひとつしないクリがいました。まだ余震も続いており、このまま室内に留まるのは危険と判断してひとまず近隣の開けた場所に移動することにしました。クリも連れて行こうと名前を呼びますが依然として微動だにしません。どうやら腰が抜けてしまったようで、仕方なく10kgオーバーの体を小脇に抱えて逃げるようにして外に出ました。その後も余震は続き、その都度クリは跳ね起き、余震が止んでからも視認ができるほどブルブル震えていました。また、余震と同じくらい顕著な反応を示したのが緊急地震速報のアラーム音です。何の前触れもなくテレビから流れるアラーム音と地震はクリの中でしっかり結びついており、この音が流れたら地震が来るぞと身構えて先んじて体が震え出していました。

この東日本大震災では被災された人達だけでなくペットの処遇も多く取り沙汰されました。辛い思いをしたペットもたくさんいたと聞きます。人間だけでなくクリのように地震に怯えながら暮らしたペットも多くいたと思います。今ではクリは地震のない場所に旅立ちましたが9月1日の防災の日に防災無線が鳴り響きますと気が弱くて、ちょっと情けないクリのことを思い出さずにはいられません。

④ 憎悪　　⑤ 敷設　　⑥ 読経　　（こたえは8,9ページ）

ペットロスにならないために

ヤマ動物病院（世田谷区）
獣医師　島野　富美江

飼われている動物の名称がペットからコンパニオンアニマルとなり、ご家族の一員として大切に扱われるようになって随分経ちます。お子さんと同じように思われている方も大勢いらっしゃいます。昔よりとても長生きになって、その分病気になってしまうことも増えました。それに伴って、ペットが亡くなった時「ペットロス」になってしまう方も増えているように見受けられます。

人間の世界でも、「ピンピンしていて、ポックリ死にたい」とおっしゃる方が多いそうですが、なかなかそううまくはいかないようです。動物にも同じことが言えます。老衰で安らかに亡くなるばかりではありません。

犬や猫は、自分で自分の症状を言うことが出来ません。また、自分で今後どうしたいかも言えません。飼主さんが観察して、異常を見つけてもらうしかありません。

動物の治療について私が最近考えているのは、飼主さんが心残りないようにしていただきたいということです。ペットのことを一番良くわかっている方が、今後どうされたいか決めるべきです。

わかりやすい例では、ガンが見つかった時に手術をするのか、内科的に治療するのか、何もしないのか。どこまで病状が進んでいるのかにも困りますし、動物の性格もありますし、飼主さんの死生感もあります。治療費の問題もあります。

それらを全部良く考えて出した答であれば、動物たちも余生を幸せに過ごせるでしょう。また、飼主さんたちも心安らかに過ごせると思います。亡くなってすぐは悲しまれるでしょうが、ペットロスになることは少ないでしょう。ああしてあげれば良かったと後悔することがペットロスにつながってしまう気がします。

人間の子供は成長して独り立ちしていきますが、たとえ子供のように可愛がっていても動物は先に旅立っていきます。また、そうでなければならないと思います。どんな形であれ、最後まで一生きちんと面倒をみることが飼主としての責任です。

時間の流れとともに楽しく過ごした時期のことを忘れてしまいがちですが、亡くなる前のことだけでなく若い時のことも思い出して頂きたいです。一緒に素晴らしい時を過ごせたのに、最後の印象だけしか残らなかったら、それこそペットが悲しむと思いませんか？